

第II章 学 史

A 玄昉の首塚

筑紫観世音寺にいた玄昉が、藤原広嗣の霊に祟られ、五体ばらばらにされ、南都各所に落下したという伝説は、『元亨釋書』『扶桑略記』『源平盛衰記』『平家物語』が記すが、頭骨の落下地点は興福寺の唐院、南大門、西金堂と一致しない。頭塔こそが玄昉の頭を埋めた墓であり、そのために頭塔と呼ぶという説は、大江親通(?-1151)が、嘉承元年(1106)と保延6年(1140)に南都を巡礼したときの記録とされる『七大寺巡礼私記』まで遡り、当時の姿を「十三重大墓」と記している。この玄昉首塚説は江戸時代まで根強く残った。15世紀半ばには成立していた『七大寺巡礼記』は『七大寺巡礼私記』を引き写し、貞享4年(1687)刊行の『奈良曝』にも類似の記述が見られる。享保20年(1735)完成の『奈良坊目拙解』は、遺骨が空から降ったのではなく、玄昉の門弟が持ち帰り密かに埋めたと解釈した。かつて頭塔頂上にあり現在は西南側に移された石標には「僧正玄昉之御頭塔」と記してある。なお今日に残る奈良町の地名「肘塚」(かいなづか)のほか、「眉目塚」(現大豆山町崇徳寺)、「胴塚」(押上尼橋町)も玄昉の体を埋めた場所と言われたことがあった。

玄昉伝説

B 実忠の土塔

大正5年(1916)、佐藤小吉が石仏を報告した際に、玄昉の骨を葬ったかどうか不明と述べるとともに、元来は土で築いた塔であって、頭すなわち頂上に十三重石塔を置いたので頭塔と呼んだと推定した(佐藤 1916)。佐藤の報告後、石仏が注目を集め、拓本で石仏が摩滅する恐れが出てきたため、大正11年(1922)に史跡に指定された。上田三平が昭和2年(1927)に報告した際には、すでにストゥーパ説や曼荼羅説が有力になっていた(上田 1927)。また昭和3年(1928)には津田敬武が須弥山説を唱えた(津田 1928)。

昭和4年(1929)に板橋倫行(板橋 1929)、昭和7年(1932)に福山敏男(福山 1932)が、あいついで重要な説を提唱した。両氏が基づいた史料は以下の3件である。

板橋・福山説

①『東大寺要録』巻七、「東大寺権別当実忠二十九箇条事」の「奉造立塔一基(在新薬師寺西野。以去景雲元年所造進也。)>」、②『東大寺要録』巻六、「新薬師寺…実忠和尚西野建石塔。為東大寺別院。」、③『東大寺別当次第』大僧都良恵の項、「神護景雲元年、実忠和尚依僧正命、御寺朱雀之末、作土塔。」

①の「塔」、②の「石塔」、③の「土塔」が同じものを指し、所在地が新薬師寺の西方の野で、東大寺の南の末であるから、まさしく頭塔のことであり、実忠が神護景雲元年(767)に造立したものと説いたのである。以後これがほぼ定説となって今日に至った。昭和8年(1933)に足立康は、板橋・福山説に賛意を表するとともに、興福寺菩提院内に真の玄昉の墳廟があり「頭塔」と呼ばれていたが次第に忘却され、いつしか実忠の「土塔」と混同されたと説いた(足立 1933)。以後、議論の中心は、塔としての構造、石仏の意味、造立の背景となった。

C 頭塔の構造

大正5年に佐藤小吉が頭塔を学界に紹介した頃から、玄昉首塚説を採らぬ論者の多くは頭塔を一種の塔と認めていたが、問題はいかなる塔とするかであった。

外周施設について、『七大寺巡礼記』は、足立康の研究と紹介によって『七大寺巡礼私記』が広く知られるまでは(足立 1932・1933)、頭塔に関する最古の史料と言われていた。『七大寺巡礼記』は『七大寺巡礼私記』を引用する部分が多いが混乱もあり、頭塔の近くに「僧正門」なる門があったかのように記している。西村貞はこれをサンチーやパールフトの大塔に見られる塔門の類と解し、頭塔をインド風のストゥーパと見る根拠とした(西村 1929)。しかし足立康は『七大寺巡礼私記』に基づき、興福寺の門の一つである「僧正門」と頭塔が無関係であることを明らかにした(足立 1933)。また田中重久は瓦の出土を根拠に南側に木造礼拝堂を想定した(田中 1943)。

瓦葺屋根

塔本体について。石田茂作は1957年から頭塔の踏査を重ね、4段4重の階段状石積があって、石積に設けた仏龕に石仏を安置したこと、石積の周囲に石敷の「歩道のようなもの」が巡ることを推定した。また、1952年に緊急調査され様相が判明した大阪府堺市大野寺土塔のように、盛土上に直接に瓦葺したと考え、歩道の外側に傾斜のある土盛を作り「軒出の無い護石一ぱい」に瓦葺したという重要な指摘をした。さらに、今日では基壇と判明している段にも瓦葺屋根を乗せて五層塔に復原し、各層四方に仏像を安置し、各層をめぐる礼拝できる施設は塔の本来に忠実なものとして評した(石田 1958)。頭塔の南面にある石段について、西村貞はストゥーパは礼拝の対象で登るものではないから後世のものとしていたが(西村1929)、後には「もとの遺構とおもえる石階」を登って各段の仏龕を巡拝する仕組みと考え直した(西村1957)。歩道を認める石田説と通じるが、「石階」と南面の石段との関係は不明である。昭和35年(1960)、森蘊は復原研究の根本資料として、頭塔の精密な測量図を作製した。それに基づき、上下の間隔2.25mごとに4段を設けて石敷通路とし、そこに面して仏龕状に石仏を配し、その数は各面の下から順に3・3・2・1個、総計36個と復原した。また塔の南北主軸線が東大寺大仏殿を意識して設定され、東大寺西塔が頭塔の磁北方向にあるとした(森 1961・1971)。

精密な測量

頂上の施設について。佐藤小吉は『七大寺巡礼記』に基づいて頂上に十三重石塔があったと考えていた(佐藤1916)。西村貞はこの十三重塔を盤蓋と解し、頭塔をインド風のストゥーパと見る根拠とした(西村 1929)。1954年に石塔の相輪らしき六角柱の破片が発見された。西村はこれに注目し、頂上の石塔は、奈良市田原所在の「塔の森石塔」のごとき六角十三重塔だったと論じた(西村 1957)。以上の説は、頂上に十三重石塔を置くのが本来の姿と考えたのである。これに対し石田茂作は、この六角柱を石積外側の歩道の欄干とし、最上層には山村廃寺出土品のような露盤・覆鉢・刹・九輪からなる石製相輪を置いたとした(石田 1958)。石田の場合、『七大寺巡礼私記』の「十三重大墓」という描写を重視せず、堀池春峰も創建の形をとどめぬ程に崩壊していた結果にすぎぬとみた(堀池 1964)。津田敬武は昭和3年(1928)、頭塔須弥山説の立場から、瓦の出土を根拠にして頂上に帝釈天の善法堂に擬した小堂があり、山腹所々にも建造物が建っていたと推定した(津田 1928)。孤立した説だったが、瓦に言及した点が注目される。1978年の発掘調査開始後に明らかとなった点はFで述べる。

十三重
の解釈

D 石仏の意味

各面の第1段中央の4基、N1c・E1c・S1c・W1cに注目し、四方四仏の浄土とする説は、早くから諸氏の説くところである。佐藤小吉は金光明経に基づく四方四仏と眷族で、釈迦三身を顕し、W1dは涅槃とした(佐藤 1916・1924)。上田三平は四仏を宝生・薬師・釈迦・阿弥陀、W1dを涅槃ないし金棺出現、S1xを牛乳供養とした(上田1927)。西村貞は各面の第1段中央が主尊、自余が分身仏で、四仏を金光明経壽量品所説の阿閼・宝生・無量壽・微妙聲ではなく弥勒・薬師・釈迦・阿弥陀とみるとともに(西村 1929・1957)、W1dを釈迦涅槃、W1xを正覚の釈迦、S1xを苦行の釈迦(牛乳供養)とし、最下段に釈迦八相を2景ずつ4面に配置したと推定した(西村1957)。薬師・釈迦・阿弥陀・弥勒の四方四仏と釈迦八相とみる説は、石田茂作(石田 1958)・小野勝年(小野 1970)などに受け継がれた。石田は花天蓋五尊像・二重楼閣七尊像、単層楼閣三尊像、単層楼閣五尊像という様式の異なる4組の四方仏を、各段に1組づつ置いたと考えた。

四方四仏

釈迦八相

久野健は西村説に異を唱え、S3cは盧遮那仏、N1cは弥勒に限定できず釈迦・阿閼の可能性があり、E1cは薬師でなく釈迦如来、W1dは涅槃でなく金棺出現とした。多数の如来があることから、四方四仏+釈迦八相だけでなく、大仏の蓮弁に彫られた蓮華藏世界に住する多数の仏菩薩という世界観も考慮する必要があると説いた(久野1977)。1987年の本格的発掘調査開始後に明らかとなった点についてはFで述べる。

蓮華藏世界

E 造立の背景

造立の目的について。「東大寺権別当実忠二十九箇条事」には実忠の造塔の目的を「奉為国家」とのみ記すが、堀池春峰は具体的に、百万塔や十大寺の小塔院の造営と同じく惠美押勝の乱を契機として人心安定を図ったものとした(堀池 1964)。

資材・工人の動員について。堀池は、天平勝宝9年(757)までに完成した東大寺の講堂・大仏殿回廊用の瓦の残りを転用し、石仏・石材面では造東大寺司の石工を動員したと論じた(堀池 1964)。杉山二郎も石仏を東大寺の大仏殿前燈籠樂天像・誕生釈迦仏像と同系の仏師の作品とし、造東大寺司の関与を認めた(杉山 1967)。

仏塔としての特殊性の成因について。頭塔をインド風ストゥーパとみる西村貞氏は、インド文化流入の背景として、インド人(菩提僊那)の渡来、学問僧(玄昉)の中国におけるインド知識の習得、インド知識を有する中国などの僧(唐僧道瑨、林邑僧仏徹)の渡来をあげ、菩提僊那(婆羅門僧正)の頭塔造営への関与を推測した(西村 1929)。石田茂作も頭塔の形がインドの塔・ミャンマの泥塔に類似し、仏塔の発展方向のうち、垂直に伸びる傾向が中国に、雛壇式に横に広がる傾向が南伝し、後者が菩提僊那、仏哲の来日にもなって伝来したとみる(石田 1958・1972)。森蘊は石仏の平面配置およびW1d石仏の涅槃図にインド的要素の影響が濃厚とし、実忠が創始したとされる二月堂修二会行事や他の事績も考慮して、実忠インド人説を唱えた(森 1971)。斎藤忠は、頭塔以外にも堺市大野寺土塔、岡山県熊山町熊山遺跡といった特異な仏塔を、ポロブドゥールとの類似から東南アジア系統とみなし、南海経由で情報が入ったと想像した(斎藤 1972)。

南方系説

F 発掘の開始

1987年に本格的発掘調査が始まると、上述の問題点のいくつかが解決するとともに、あらたな疑問が発生した。詳しくは本文に譲るが、研究史の流れからみて重要な新知見を纏めておく。

下層の発見

①構造について。下層・上層の2時期あると判明したのが大きな成果である。下層石積は上層への改造の際に破壊された部分が多く、構造は不明の点が多いが、基壇上に3段の石積が乗ると推定できる。岡山県熊山遺跡石積遺構と類似して石積が高くテラスの幅が広い。上層と同じく瓦葺きである。大型の仏龕が東面第1段中央にあるが、対応する西面にはなく、他は不明である。上層石積は、下層の基壇を踏襲し塔本体は石積と石敷からなる。従来知られていた石仏がある4つの段の間にも段があり計7段となる。各面の第1段に5、第3段に3、第5段に2、第7段に1個所、総計44個所の仏龕を設ける。頂上には当初刹柱が立っていた。落雷による廃絶後に十三重石塔に替わったと推定できる。『七大寺巡礼私記』の「十三重大墓」はその描写であろう。上・下層ともに特殊な石積法を用いている。

7重か 5重か

多量の瓦の出土から瓦を葺いたのは明らかだが、瓦葺きがすべての段か、奇数段の上だけかが問題として残った。奈良国立文化財研究所が7重案と5重案(巽 1989)、楊鴻勛が3種の5重案を示した(浅川 1994)。楊の2案は最上層に覆鉢形の土饅頭を置く案と、その上にさらに木造屋根を乗せる案で奇抜である。また杉山信三が石積を芯として上に木造覆屋をかぶせる5重戒壇案を出した(杉山 1991)。

法華經 の影 響

②石仏について。発掘以前に13体知られていたが、あらたに14体と抜き取り痕跡5個所を発見し、配置の原則も明かとなった。ほかに大和郡山城の石垣にも1体転用されている(森 1971)。松浦正昭はそれらに基づいて図像解釈を試みた。すなわち、これまで薬師とされることが多かったE1cを法華経見宝塔品による多宝仏浄土に改め、E3a・E5a・E5bも法華経の見宝塔品ないし如来寿量品に基づくとした。また従来、正覚の釈迦とされたW1x、苦行の釈迦(牛乳供養)とされたS1xを、新発見のN1aとともに、華嚴経入法界品による善財童子善知識歴参図とし、N5a・S3a・W3bを華嚴経による十身具足の毘盧遮那仏とした。これらから頭塔石仏の構想には法華経の影響が入った華嚴教学の関与を認めた。また南面・北面の中軸線に応身・報身・法身の三身仏の構想が見られ、東大寺大仏と同じ造像構想を背景にもつとした(松浦 1997)。

③資材の調達について。上下層ともに、葺いた瓦は東大寺創建期の6235Mb-6732Faが圧倒的に多く、造東大寺司の深い関与が追認できた。刹柱の礎石も東大寺からの転用だろう。

④造立の背景について。頭塔を実忠の造営した土塔とするのはほぼ定説化していたが、下層石積の存在が判明したことによって、下層・上層それぞれの造営時期、実忠が関与したのが下層から上層からか、改造の理由、改造に際しての造立構想の変更の有無、などの新たな問題が発生した。また、堺市の大野寺土塔の様相が近年の発掘調査で判明するにつれ、頭塔との関係の有無、あるいは大野寺創建者の行基や、行基と親交があり東大寺とも関係深い菩提僊那と実忠との関係などが新たな問題となり、東大寺大仏の造像構想・教学も再検討の必要が生じてきた。杉山信三は、上層のみならず下層も戒壇とし、行基が聖武天皇に授戒した戒壇と推定した(杉山 1991)。

参考文献

- 浅川滋男 1994 「楊鴻勛先生の来日と頭塔復原」『奈良国立文化財研究所年報1993』。
 足立 康 1932 「『七大寺日記』と『七大寺巡礼私記』」『東洋美術』16。
 足立 康 1933 「『南都七大寺巡礼記』の研究」『東洋美術』17。
 足立 康 1933 「頭塔に関する一考察」『古代文化研究』6。
 石田茂作 1958 「頭塔の復原」『歴史考古』2。
 石田茂作 1972 『塔 塔婆・スツーパー』日本の美術77。
 板橋倫行 1929 「頭塔について」『文学思想研究』9。
 上田三平 1927 「頭塔」『奈良県に於ける指定史蹟』第一。
 小野勝年 1970 『石造美術』日本の美術45。
 久野 健 1977 『石仏』日本の美術36。
 斎藤 忠 1972 「わが国における頭塔・土塔等の遺跡の源流」『大正大学研究紀要 文学部・仏教学部』57。
 佐藤小吉 1916 「頭塔山ノ石仏」『奈良県史蹟勝地調査会報告書』第3回。
 佐藤小吉 1924 「頭塔に就きて」『仏教美術』1。
 杉山二郎 1967 『天平彫刻』日本の美術15。
 杉山信三 1991 「大和 頭塔復原案の一つ」『史迹と美術』618。
 巽淳一郎 1989 「頭塔の調査 第199次」『昭和63年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』。
 田中重久 1943 「頭塔の研究」『日本に遺る印度系文物の研究』。
 津田敬武 1928 「奈良の頭塔は須弥山にあらざるか」『考古学雑誌』18-5。
 西村 貞 1929 『南都石仏巡礼』。
 西村 貞 1957 「奈良頭塔の石仏」『仏教芸術』30。
 福山敏男 1932 「頭塔の造立年代に就いて」『考古学雑誌』22-6。
 福山敏男 1971 「戒壇と土塔」『新版考古学講座』8。
 堀池春峰 1964 「奈良の頭塔について」『大和文化研究』9-5。
 松浦正昭 1997 「頭塔石仏の図像的解釈」『国華』1215。
 森 蘊 1961 「頭塔の実測調査を了えて」『奈良国立文化財研究所年報1961年』。
 森 蘊 1971 『奈良を測る』。

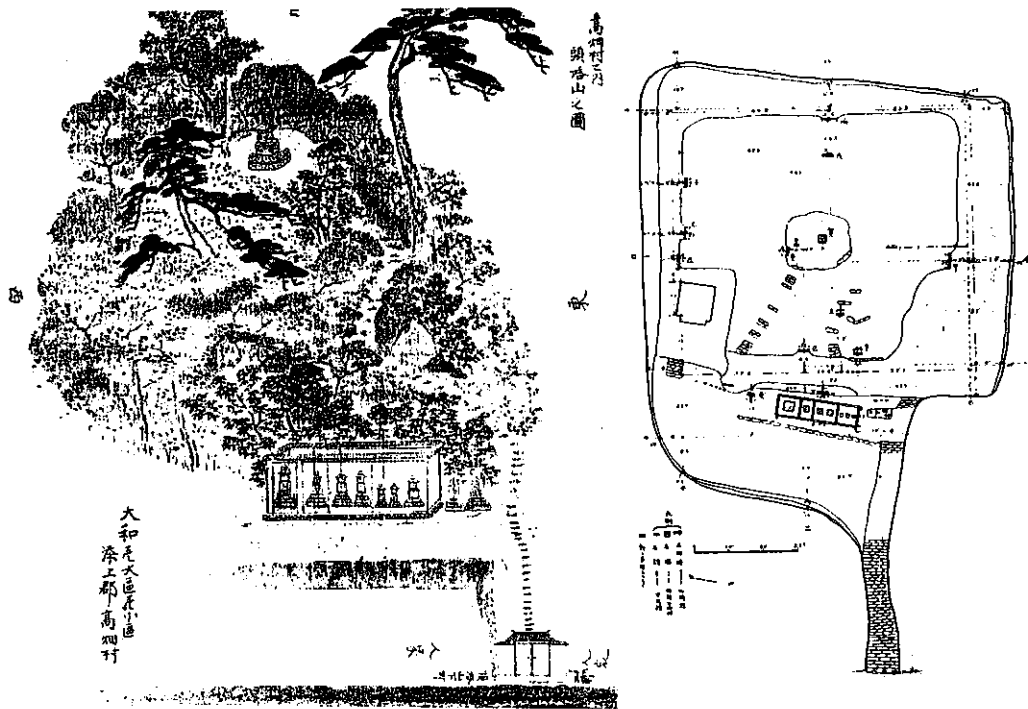


Fig.1 頭塔の旧状（佐藤1916による。左は江戸時代、右は明治13年。）